



釧路湿原国立公園

# 不毛の大地が 世界の宝へ

国立公園ものがたり



釧路湿原国立公園

不毛の大地が  
世界の宝へ

国立公園ものがたり





# 不毛の大地が 世界の宝へ

国立公園ものがたり

## 釧路湿原国立公園と ともに歩む

### 目次

04	釧路湿原国立公園 大地を潤し、命を育む 釧路地域を象徴する大湿原	20	[聞き書き] 照井滋晴さん 知れば知るほど「わからない」が増えていく キタサンショウウオに魅せられて
08	[聞き書き] 新庄久志さん 名もなき原野を地域の誇りに 湿原を見つめ続けた半世紀	24	[聞き書き] 小川清史さん 旅の果てに辿り着いた塘路で 湿原にカヌーを浮かべ、伝える
12	[聞き書き] 佐竹直子さん 湿原を歩くと「人」が見えてくる 取材を通して出会うものがたり	28	[聞き書き] 濵谷雄太さん 河川への土砂流出を防ぐことが、 湿原を守ることにつながる。 山のための間伐で自然を保護していく。
16	[聞き書き] 原田香苗さん 地域資源であり、財産であり、尊い存在。 そんな釧路湿原を守るための観光業。		

日本の国立公園は、アメリカなど世界のいくつかの国立公園と異なり、集落や農林水産業などが行われている地域も含めて公園区域に指定していることから、公園内に人々の暮らしや産業があるのが大きな特徴です。そのため、国立公園の管理は、これらの人々の暮らしや産業などの調整を図りながら、地域の人々とともに進めています。本誌の舞台は、日本最大の湿原と壮大な蛇行河川で知られる釧路湿原です。釧路湿原は1987年に国立公園に指定されました。広大な湿原の歴史は約2万年前に始まります。そこから長い年月をかけて海はやがて湿地となり、いくつかの湖沼ができあがり、現在の姿が形づくられました。

域の宝である湿原を守る」という思いと行動は人から人へと伝わり、ラムサール条約湿地の登録、国立公園の指定につながります。本誌にはその思いを広めた人たち、受け継いだ人たち、そしてその思いを未来に向けて形にする人たちの声を集めました。

『国立公園ものがたり』は、国立公園制度100周年となる2031年にかけて行う「国立公園制度100周年記念事業」の一つとして、日本のすべての国立公園において作成する聞き書き集です。この『国立公園ものがたり』を通して、地域の宝である国立公園の自然、その自然とともに生きてきた人々の歴史、文化、ストーリーを見つめなおし、次の世代、次の100年にしっかりと引き継いでいただけることを願っています。

聞き書き集とは、話し手に自身の生き様を語ってもらい、その人の言葉をそのまま書き起こしてまとめたものです。口調や方言などもそのまま文章化することから、読み手は話し手の人柄や感情をリアルに感じ取ることができます。地域の人が紡いできた国立公園のストーリーを、地域の言葉でお楽しみください。



# 釧路湿原国立公園

大きく蛇行しながら流れる釧路川の周囲には

ヨシやスゲ、ミズゴケ湿原の水平的景観が広がります。

ここは、生き物たちが命をつなぐ水の楽園。

人の暮らしのすぐそばにあり続けるその大地は、

どのように守られ、受け継がれてきたのでしょうか。

湿原に生きる人々に映る景色にふれました。

## 大地を潤し、命を育む 釧路地域を象徴する大湿原

約1万年前から6000年前にかけて、釧路湿原  
一帯は海でした。徐々に海が後退したあとも低  
地には水が残り、泥炭などが堆積し、やがて湿  
原が形成されたのです。そこには独特の動植物  
が織りなす豊かな生態系があり、人も含めた生  
き物たちが互いに影響し合いながら暮らしてい  
ます。1980年に日本初のラムサール条約湿地に  
登録され、1987年には釧路湿原国立公園が誕  
生。現在2万8788ヘクタールが公園区域とし  
て保護や適正な利用の対象となっています。

指定年月日 | 1987年7月31日  
面積 | 2万8788ヘクタール  
エリア | 北海道

## 釧路湿原の歩み

- 1918 (大正7)年 農地開発のための北海道開発地泥炭地調査が開始。
- 1951 (昭和26)年 「釧路泥炭地開発計画」が策定される。
- 1958 (昭和33)年 北海道学芸大学釧路分校 (現・北海道教育大学釧路校) の田中瑞穂教授が論文で釧路泥炭地を「釧路湿原」と呼び変えた。
- 1963 (昭和38)年 「釧路原野農業開発基本計画」が発表される。
- 1967 (昭和42)年 国の天然記念物に「釧路湿原」が指定される。
- 1971 (昭和46)年 現・釧路市立博物館が「釧路湿原総合調査団」を発足。研究者をはじめ地域住民が参加した4年にわたる調査で多種多様で希少な動植物や新種を発見した。
- 1972 (昭和47)年 「日本列島改造論」の一つに釧路湿原の開発が挙げられる。  
釧路市と釧路地方総合開発促進期成会が、市民シンポジウム「釧路湿原の開発と自然保護を考える」を開催。経済界代表と自然保護関係者が懇談。  
釧路自然保護協会が、釧路湿原の「国定公園化構想」を提案。
- 1980 (昭和55)年 釧路湿原中央部5012ヘクタールが、国際的に重要な湿地として日本で最初のラムサール条約湿地に登録される。
- 1981 (昭和56)年 釧路湿原の国定公園化構想を発展させた「国立公園化構想」が発表される。
- 1987 (昭和62)年 釧路湿原とその周辺丘陵地が全国28番目の国立公園に指定される。湿原単独としては第一号。
- 1993 (平成5)年 釧路市でラムサール条約締結国会議が開催。95カ国が参加し、約1万人の市民ボランティアが会議を支えた。
- 1995 (平成7)年 ラムサール条約の理念に基づく湿地の保全と賢明な利用 (ワイズユース) の推進と国際協力のため、釧路国際ウェットランドセンターが設立される。
- 1997 (平成9)年 釧路湿原国立公園連絡協議会が発足。
- 2003 (平成15)年 釧路湿原自然再生協議会が発足。

(釧路国際ウェットランドセンター HP 年表「釧路湿原のあゆみ」を改変)



# 釧路湿原国立公園の みちしるべ



## 地域住民の手で 湿原を守る

釧路湿原で誇るべきは、調査研究や自然再生の取り組みが専門家だけでなく地域住民によって行われていることです。地域の当事者意識が人々に恵みをもたらす湿原の持続的な保全には欠かせません。

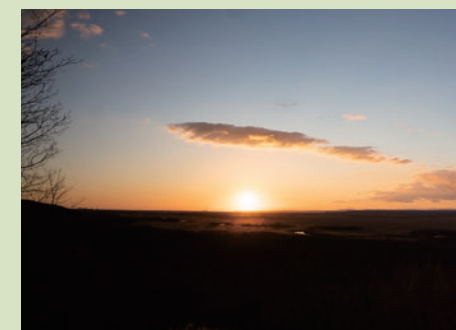


## 湿原ならではの自然体験

野鳥や動物たちへの影響を考え、釧路湿原国立公園内では動力船の利用を禁止。手漕ぎカヌーでのゆったりとした川下りや徒歩でのネイチャーツアーにおいては、感覚が研ぎ澄まされ、自然の音に包まれた静かな時間に没入できます。

## 湿原と町が共存

人が立ち入れないエリアを観光列車の車窓から眺めたり、アクセスしやすい木道や展望台から景色を楽しんだりできるのも魅力。人々の暮らしと隣り合わせに存在する湿原では、環境負荷の少ない観光が行われています。



## 希少な動植物の生息地

キタサンショウウオなどの両生類、イトウなどの魚類、タンチョウやオジロワンなどの鳥類をはじめとした生き物や、希少な植物など、湿原は動植物の宝庫です。



## 上流の森を守り、育てる

湿原周辺の森も重要な役割を果たしています。湿原河川の上流域に広がる森を間伐などで手入れすることで、土砂の流入を防いだり、離農地への植樹で森を増やしたりする取り組みも行われています。

## 湿原を知る・伝える

ラムサール条約湿地への登録や国立公園指定には、長期にわたる定点観察や研究により湿原の仕組みが解明されてきたことが大きな力になりました。子供たちへの環境教育や地域の人と行う自然再生事業で次世代へもつないでいます。





聞き書き  
新庄久志さん

## 名もなき原野を地域の誇りに 湿原を見つめ続けた半世紀



湿原という言葉にまだなじみがなく、身近な湿地はただ「ヤチ」と呼ばれた時代。独特の成り立ちや仕組み、豊かな生態系に魅了され、その土地を探索した人たちがいました。類いまれな環境はやがてラムサール条約湿地や国立公園という肩書きを手に入れ、地域の誇りとなります。土地開発と自然保護の大きな波のなかで、釧路湿原の調査と保全に情熱を注いだ先達の1人が新庄久志さん。国立公園化への歩みを知る新庄さんのお話は、未来への道標となることでしょう。

しんしょう・ひさし／1948年、帯広市生まれ。教師を目指して入学した北海道教育大学釧路校にて、「釧路湿原の名付け親」として知られる田中瑞穂教授に師事し、植物生態学の道を歩む。釧路市立博物館に植物担当学芸員として勤務しながら、地域住民とともに湿原調査を続け、釧路湿原のラムサール条約締結や国立公園化に尽力した1人。現在、釧路国際ウェットランドセンター技術委員会委員長を務める。

### 湿原の世界へと導いてくれた 偉大な恩師との出会い

この木道はね、釧路湿原の自然を作る3つの要素、つまり「ハンノキ林」と「ヨシやスゲの草原」と「ミスゴケ湿原」、その全部を片道1キロメートルちよつとで見られる遊歩道としてデザインされたんだ。釧路湿原国立公園ができたのが1987年。その5年後にこの温根内<sup>おんねい</sup>ビジターセンターと木道が完成した。山ばかり登っていた僕が湿原の調査をするようになったのは、まさにこの温根内がきっかけなんだよね。

僕は帯広の生まれでね、学校の先生になりたくて、釧路の学芸大学(現・北海道教育大学)に入学したんだ。山で遊ぶのが好きで、雌<sup>め</sup>阿寒岳や雄<sup>お</sup>阿寒岳とか、とにかく山に登ってた。だから大学の研究室を決めるときも、山に行けそうな生物を選んだんだ。そのときに先生が田中瑞穂先生(※1)だった。

高山植物の研究と称して、僕は山を走り回ってね。卒論を書くときに先生がこう言った。「山なんて登らなくても釧路には高山植物があるんだ」って。学校のすぐそばの春採<sup>はるとり</sup>公園と一緒にいったら、本当にあるんだよ。クロユリもコケモモもガンコウランもあったよね。それで驚いてたら、この温根内の湿原に連れてきてくれたんだ。

当時は道路なんてないの。鶴居村営軌道っていうバスみたいに小さい気動車で温根内まで来て、胴長履いてき、ヨシの間に頭だけ出

てる背の高い先生について歩いた。道もない湿原だからツボ足(※2)だよ。やつとスゲ原を越えて「ほら」って見せてくれたのが、イソツツジの大群落だったの。先生は策士だねえ。ちよつと花が満開の時期でさ、目の前にびっしり、真っ白な花が咲いてるんだよ。あんな大群落は山に登らないと出合えないものだと思ってたから、参ったね。それがきっかけで先生の湿原調査を手伝うようになったんだ。

※1 湿原研究の第一人者。公の文章で「釧路湿原」という名称を初めて使ったとされる。

※2 登山用語。降り積もった新雪の上を歩くときなど、足を踏み込んで壱状の足場を作りながら歩くこと。後に続く者は同じ足場を踏みながら進む。

### 地域の人々と価値を見出し、 保護すべき場所に

結局、僕は教師にはなれなかったんだけど、田中先生は僕が就職できないかと思っただろうね。研究室に机を置いてくれて、お茶くみやご自宅の温室の管理をやるようになった。釧路市立博物館のアルバイトも紹介してくれてね。その後、学芸員の資格を取って、博物館に就職することができたんだ。

その頃、釧路市立博物館に澤四郎さんという人がいて、彼は北海道の三天博物館(網走、函館、釧路)の三大学芸員と呼ばれる存在だった。澤さんは「博物館はすべての学術的なことを集めて市民に還元すべきである」という

考え方でね。学芸員は3つのことをやりなさいと言ったんだ。「地域の調査研究」、「標本や資料作り」、「市民への還元」。田中先生はその先輩とも懇意でね、みんなで「湿原総合調査」をやろうと言いつ出した。それで、僕も手伝うことになったんだ。

総合調査団のメンバーにはいろんな人がいたよ。「地域のことは地域の人を知っているから、地域の人で調べべき」という考えだね。写真家の林田恒夫さん(旧千円札のデザインになったタンチョウの写真を撮影)とか、水鳥に詳しい猟友会のメンバーとか、イトウをはじめとした魚のことは土佐良範さん(塘路漁協組合長でワカサギ漁業者)、昆虫は林業の飯島一雄さん(釧路市立博物館に多くの昆虫標本を寄贈)とかね。それにキノコだとか野草に詳しいお母さんたちも加わった。夏も冬も、みんなボランティアでね。足掛け5年の調査をして報告書を作り上げて、その内容をもとに市民講座もやってさ。

普通ならそれで終わるんだよ。ところが、集まった市民たちが「すごいね」「なんとか守りたいね」って声を上げた。当時、公害問題もあって日本中で自然保護運動が始まっていた。環境庁ができて、知床や大雪山の自然保護の声も大きく聞こえはじめた頃だ。一方で、日本列島改造論が北海道のヤチを開墾するって話を進めていた。

それで田中先生とその仲間が、北海道自然保護協会釧路支部というのを立ち上げた。先生の考えは「釧路湿原の利用と保護」という

ものでね。保護するだけじゃなく、守りながら利用していくのが地域のためになると。この考えには、湿原総合調査をやったメンバーや、北海道大学の植物園園長だった辻井達一先生という人もいた。辻井先生は田中先生の友達でね。何かあると、「やるっきゃない」ってみんなの背中を押してくれた。

そんなこともあって、開発の方向で動いていた市長宛てに、田中先生は手紙を書いてね。開発推進派と自然保護派とが集まって、シンポジウムをやることになったんだ。農業者、漁業者、商工会議所も加わって、3日間の議論をしたんだよ。

1日目はもう話し合いにもならない感じで終わった。2日目に田中先生が「どうやって利用と保護をするんだ」と責められて、国立公園化構想というのを出したんだ。環境を保護すれば観光地としてこんな利用ができるという例をかなり具体的に挙げたんだよね。当時の釧路の産業は石炭と製紙と漁業。これが怪しくなってきた、商工会議所では次の基幹



釧路湿原のイソツツジ



産業が必要だと思っていた。それで田中先生の提案が3日目に採択されたんだ。

ちょうどその頃、世界ではラムサール条約がスタートした。釧路湿原の利用と保護という考えは、ラムサール条約が提言する「保護と利用」の考えと非常に近かった上に、データーや地域の同意などの条件もたまたまクリアしてたんだよ。環境庁の働きかけで北海道から手を挙げて、1980年に釧路湿原がラムサール条約湿地になったわけだ。

## 「ヤチ」から「釧路湿原」へ ついに国立公園が誕生

僕たちは湿原総合調査が終わった後も、湿原でのモニタリング調査を続けていた。実は僕を含め、たぶんみんな「湿原を守ろう」なんて気持ちじゃなかったな。とにかく研究が

おもしろいからやってたんだよ。湿原では必ず新しいことを見付かるんだよ。みんなワクワクして行ってたよ。

今まで地元の人が無毛の大地のように「ヤチ」と言っていた場所が、突然、ラムサール条約湿地として国際的な湿地になった。ヨーロッパやアメリカから研究者も来るようになって、新聞やテレビでも報道されてね。僕たちの冬の調査キャンプがNHK特集の番組になったりして、釧路湿原に観光客をどうやって呼ぶかという議論がだんだん盛り上がってきていた。

そんなときに、国立公園に申請したら？という話が出たんだ。世界を見渡すと、ラムサール条約湿地が国立公園になった場所がたくさんあった。市役所も商工会議所もその気になって要請を出してみたら、ラムサール条約締結からたった7年だよ、異例の速さで釧路湿原国立公園が誕生したんだ。

それからだね、「湿原」って言葉が市民権を得たのは。旅行会社や鉄道会社も動き始めたし、釧路の街にも湿原にちなんだ名前の宿や店、お菓子なんかが続々と誕生した。湿原の歌とか、サスペンス小説まで出てきてね。それまで30〜40万人程度だった観光客が、国立公園になった翌年は200万人に増えた。その後、釧路湿原も対象になってね。湿原の調査に予算が付いたんだよ。そのおかげで、水の生態系といわれるような湿原の仕組みの調査がずいぶん進んだ。観光とはまた違った

ね。大きな音を立てて走る船より、静かに自然の音のなかを手漕ぎで進むカヌーがいい。鳥たちも逃げないしね。

僕はもう50年以上、相変わらず保護と利用、そして湿原の回復ということをやっている。今もずっとね。それでも湿原へ行くたびに、今まで気付かなかったことが見えてくるんだよ。自分の調査で行くだけじゃなく、地元の子供たちと行くと、大人とは違うおもしろい視点にハッとすることがあったりね。たとえば最近気付いたのは、ハンノキは木が枯れて根本からまた芽が出る「萌芽更新」だけじゃなく、栄養が届かないような場所ではタネを付けていた。そのタネが雪解け水で流れていって、あちこちのヨシの中に小さな芽を出して隠れる。まるで湿原がどう変わるのかを監視してるみたいだね。そして少しでも何かが変わったら、急に大きく育ったりする。それは僕たちに変化を覚えてくれるサインでもあるんだけど、結果として水の栄養塩類を吸収して、ヨシやスゲの草原にふさわしい水の環境を維持してくれているんじゃないかと思ったりするんだよ。

地域の人たちによく聞かれるんだ。「湿原の保全はいつまで続くの？」って。それは、生きてる限りじゃない？だって、湿原があるからこそ地域が成り立ってるんだから。僕が最初に参加したラムサール条約締約国会議でね、事務局長が言い切ったんだよ。「私たち人類は湿原とともに生きてきました」って。人類は湿原、つまり水がなかったら生きてい

けない。人類が生き延びるためにも湿原は守らなければならないって。

それが、すごく心に残ってる。ああ、やっぱり釧路地域の人たちは、湿原とともに生きていくんだなって。阿寒の人が森と湖と生きるように。僕たちのおじいちゃんやおばあちゃんが言っていた「人間は自然とともに生きていくんだよ」って、八百万の神の話がさ、今ならそうだなと思える。それを僕たちは今、湿原で実感してるんじゃないかな。子供たちや若者は、それが見えなくて迷っているんだと思うんですよ。学歴や友達とのあつれきだとかに追われて、人間社会のことしか見えなくなってる。でもちょっと周りを見渡せば、ほかの動物や鳥や昆虫の生き方、そして植物の生き方に触れたときに、「これって自分たちの生き方と同じかもしれない、こうやればいいんだ」っていうヒントがあるんです。だから僕たち自然の仕事に関わる者は、自然の仕組みの中に今僕たちが抱えている問題を解決するヒントがあると伝えたいじゃないんだ。未来を生きる子供たちにね。

本当に残念だけど、それを伝える語り部になれる人たちがね、どんどん先に逝ってしまった。田中先生、林田さん、土佐さんもそう。僕は残されたんだよ。だから、チャンスがある限り伝えたい。生まれたときから釧路湿原が国立公園だった人たちに、こんな人たちの努力があつて今の自然があるんだよ。きつとそれが、残された者の役目なんじゃないかと思うんだよ。

湿原の存在意義がどんどん明らかになってきて、「湿原なしでは釧路は成り立たない」という雰囲気になってきたんだよ。こうなったのは、田中先生や辻井先生たちが、地元の人々の声をうまく束ねてくれたというのも大きいと思う。非常に謙虚な人たちでね。「こうやるべきだからこうしろ」ではなく、「あなたはどう思う？」ってみんなの意見を聞いて、じゃあこうしようという導き方をずっとしていた。それが実を結んで、なるべくしなくなったという気がするよ。

## 僕たちは湿原とともに生きる 語り継ぐべき人たちの思い

21世紀になる前くらいかな、鳥好きの間で、タンチョウの営巣地が少なくなってきたという話が出た。川をよく知る人からも、湿原の川が浅くなってきているとか、増水後の土砂の様子が違うとかね。僕もハンノキ林の変化を調べたら、今までヨシの中に隠れていたはずのハンノキが、航空写真に写り始めるくらい育っているというデータが浮き彫りになった。

その頃、タンチョウの営巣地の近くに住んでいる酪農家から連絡があったんだ。ヨシの草原だった場所でハンノキがうわーっと大きくなって、もう向こうが見えなくなったって。家のすぐそばまでいたタンチョウがいなくなったって言うんだよ。それでかつてのタンチョウの営巣地を取り戻そうって話になっ



て、木を切ったり湿原の水が戻るようにしたり。5年目だったかな、ついにタンチョウが戻ってきたんだ。今そこにはタンチョウがいる。それがその後、自然再生事業のモデルになったりしてね。

誰も正体を知らない「ヤチ」が「素晴らしい釧路湿原」になり、「守りつつ利用しよう」となって、今は「壊れた自然を取り戻そう」という段階になっている。地域を育て、支えてくれた広い湿原が、人間活動の影響であちこち故障してきている。それを健康な状態に戻して次の世代へ渡そう、というのが僕たちの合言葉なんだよ。

湿原の役割には大きく2つあってね。1つは保水とか治水、野生生物の生息地の提供などの物理的な機能。もう1つは、人間への癒やしなんだと思う。人間は心の生き物でしょ。大きな湿原に夕日が落ちるのを眺めたりして、心が癒やされるんだ。国立公園になると、観光船を走らせようという話があったけど、観光客はそれを求めてなかったんだよ





聞き書き  
佐竹直子さん

## 湿原を歩くと「人」が見えてくる 取材を通して出会うものがたり



釧路市に生まれ育ち、長年、釧路市を拠点に新聞記者として活動する佐竹直子さん。持ち前の好奇心を生かし、釧路湿原に携わる人々の記録をつづり、湿原と地域住民をつなぐ活動にも励んできました。ここで暮らし続けているからこそこの「定点観測」で、どんな出会いがあり、どう湿原の魅力を発信してきたのか。地元紙記者が担うべき役割とは……。佐竹さんが語る涙と笑顔いっぱいの釧路ヒストリーは、今この地に生きる人々へのエールになりえるはずです。

さたけ・なおこ／1966年、釧路市出身。藤女子大学英文学科卒業。日本電信電話株式会社（NTT）、NHK釧路放送局、釧路新聞社を経て北海道新聞釧路支社報道部記者。北洋漁業全盛期を辿った「海を拓いた男たち」、釧路湿原を国立公園に導いた人々を追った「不毛の大地 母なる大地」などの連載を執筆。道新選書「獄中メモは問う 作文教育が罪にされた時代」で2015年度日本ジャーナリスト会議賞、地方出版文化功労賞受賞。釧路湿原の再生普及行動計画策定にも携わる。

### 思いがけなかったUターン

釧路市出身ですが、子供の頃は釧路湿原には興味がなかった、というよりは釧路湿原を知らなかった。当時の学校の授業でも触れられていなかった気がします。私は16歳まで、市内南東部にある当時釧路の基幹産業だった太平洋炭礦のお膝元の地域に住んでいて、海岸でコンブを拾って遊んだりはしましたが、植物や昆虫などに興味があるわけではありませんでした。

札幌での学生時代はバブル全盛期。ボディコンスーツを着てバイトに明け暮れ、ディスコに繰り出す典型的なパブリー女子でした。ところが札幌の広告代理店で勤務していた26歳の頃、父がくも膜下出血で倒れて、介護のために釧路へUターンすることになったのです。

介護の傍らできる仕事を探し、NHK釧路放送局のテレビリポーターに応募し採用されました。広告代理店時代は営業をしていたので、限られた時間でプレゼンすることに慣れていたので役立ちました。都会で働きたいと考えていた私は、Uターンした当初、釧路暮らしをつまらなく感じ、「札幌に戻りたい」と思っていました。リポーターとして釧路根室地域で奮闘する人たちや大自然を取材するうちに、地元の魅力に引き込まれていきました。釧路へ戻るきっかけをくれた父に、今は感謝しています。昔の友達が、今のこんな、アウトドアウェアに身を包んでいる私を見た

ら、びっくりすると思います（笑）。

父は3年間の寝たきりの生活の後に亡くなりました。介護生活を終えた私は、「正社員として働きたい」と仕事を探しました。そんな時に、地元の釧路新聞社で記者職の求人を見つけました。報道の仕事に就こうとはそれまで考えたこともありませんでしたが、「テレビやラジオでニュース原稿を読んでいたのだから、書けるかも」と。そこで、環境省が2002年に全国で最初に釧路湿原で着手した自然再生事業の取材を担当しました。

### 定点観測していく 書き手は私だけ

釧路湿原自然再生事業は、全国から多くのメディアが取材にやってきました。ローカル紙の記者だった私は、それまで道内外のメディアに対してコンプレックスがありました。でも、市内郊外のかつて牧場として埋め立てられた土地を掘り下げて湿地に戻す実験を始める日、取材中の私の隣にいた当時、釧路湿原自然再生協議会の初代会長だった辻井達一さん（故人）らに「あれが自然再生への第一歩だったと振り返る日が来るんだろうね」と言われ、「私は今すぐ貴重な瞬間に立ち会っている」と思いました。「他紙の記者は転動していくが、自分はローカル記者として釧路湿原を定点観測していこう」と思いました。「最初のひと蹴」とも言うべき日に得た気付きは、私の誇りとなりました。

その後、私は北海道新聞社に移りましたが、釧路を拠点とする取材を現在まで続けています。

定点観測するごとく釧路湿原に関する取材を続けてきたことで、若い方々の成長を見守れることも喜びです。例えば、キタサンシヨウウオ研究者として知られる、NPO法人環境把握推進ネットワークPEG（釧路市）の照井滋晴代表。北海道教育大学釧路校在学中から釧路湿原周辺に生息するキタサンシヨウウオを調査・研究する姿を見ました。大学院在学中にNPOを立ち上げ、現在まで20年近く調査研究を仕事として続けている姿は心強いです。NGOラムサールセンター（東京）の事務局を務める鈴木奈津子さんは鶴居村出身。小学生の頃、ラムサール条約登録湿地の子供たちをつなぐ環境教育活動「KODOMOラムサール」に、釧路湿原代表として何度も参加する姿を取材してきました。釧路湿原で育った若者たちの姿を見続けてきたことも私の誇りです。

### データではなく、人の物語を

記者としての自分の価値観を見出すきっかけの一つも、釧路湿原でした。自然科学は難しい。自然再生協議会の取材に行っても、勉強不足だと議論の中にながニユースなのか分からない。そんな悩みを辻井さんに打ち明けると「誰もあなたに湿原の研究者になってほしいなんて思っていない。研究データを追

うだけではなく、あなたの視点で湿原を見て地域に伝えてほしい」と言われました。

そして、「釧路湿原の保護に関わってきた『人』の記録をつづってほしい」と。「湿原の研究データはあっても、人の記録がない」と宿題を出されました。それが、北海道新聞で全58回にわたり執筆した連載『不毛の大地 母なる大地』（※）の発端です。取材では、まだ「ヤチ」と言われていた頃の湿原に価値を見出し守ってきた人たちの話に引かれ、ともにのめり込んでいきました。湿原自体というよりも、人。思い出すと、泣けてきちゃう。

※ 2007年6月〜2008年10月、北海道新聞夕刊釧路根室版



2003年に釧路市で発足した「釧路湿原自然再生協議会」の初会合で、当時の小池百合子環境相を取材する佐竹さん





釧路湿原をカヌーで巡る佐竹さん

連載は、元釧路自然保護協会の会長小川安久さん（故人）が残した資料をひもどくことから始まりました。

ご自宅を訪ね妻の久子さんに地下の書庫を開けてもらすと、太陽の光がスポットライトのように、1冊の古びた分厚いファイルに差し込みました。それは、小川さんが1970年代から携わってきた釧路湿原保全運動の記録でした。まるで私に発見されるのを待っていたかのように、鳥肌が立ちました。湿原の保護派と開発派がせめぎ合っていた討論の記録や、研究データなどがきちんと時系列に整理されていました。それらが連載の礎となりま

した。連載終了後、ファイルは久子さんからもらい受け、私の書庫に保管しています。今もその資料に助けられています。

研究者では、北海道教育大学名誉教授で地質学者だった岡崎由夫さん（故人）の姿が深く心に残っています。釧路湿原が約3000年前に海の後退によって誕生したという定説は、岡崎さんが割り出しました。「地を這うように、土をなめるように、湿原を歩いてきたんだ」と胸を張り、私の目の前で、釧路湿原の鳥瞰図を、迷うことなく一気に描きました。「水門のおじさん」こと藤田惣之助さん（故人）の話も印象深かったです。藤田さんは行政から委託を受けて岩保木水門周辺で、1931年からほぼ半世紀、戦後も電気や水道が通っていない家に暮らしながら釧路川の水位を測り続けた方。その記録はのちに水害を防ぐための貴重な研究資料となっています。

「川の番をしているおじさんがいた」という噂だけはあちこちで聞いていたのですが、藤田さん自身の記録が見つからない中、娘さんに辿り着き取材が実現しました。

湿原の近くを歩いていたら風に飛ばされてきたという、藤田さん手書きの水位測位表を集めて送ってくれた読者もいました。連載は反響が大きく「新聞は定期購読していないけれど掲載日はコンビニに買いに行っています」と言ってくれる人もいて驚きました。釧路湿原自体はもちろん、関わった「人」たちの物語に引き込まれたのかもしれない。何

千年もの歴史を持つ釧路湿原から見たら、ほんの一部かもしれませんが「辻井さんが言っていた意味はこれか。私の役割はこれだ」と実感しました。湿原は学者にとつての研究フィールドというだけではなく、市井の人たちに愛され守られてきた地なのです。

取材で大切にしているのは、事実や主旨を間違わないこと。エピソードを引き出すためには事前に勉強すること。そして、その人への「愛すること」ですよ。私は、取材するとのめり込むタイプで、取材相手にほれっぼい人って、自分の話をちゃんと聞いてくれていかどうかわかるじゃないですか。「私はあなたの考え、思いを知りたい」という姿勢を示すことを大事にしています。

同じ質問でも、何回か繰り返すうちに答えが変わる場合があります。「佐竹さんからの取材を通して、自分の気持ちに気付くことができた」と言ってもらえることがうれしいです。記者という立場を越えて、私のためではなくその人自身に自分の気持ちを確認してもらい、記憶を呼び戻すきっかけとなる役割でありたいです。

辻井さんに「データではなく人の物語を」と言われましたが、今は取材してきた人たちの物語に、データが付いてくる感じです。照井さんの姿を通してキラサンショウウオの生息の変化や土地の開発状況が見えてきたり、湿原を半世紀歩き続ける釧路国際ウェットランドセンター技術委員長・新庄久志さんの姿を通しハンノキ林の変遷を感じたり。湿原を

歩いていると、そこに関わってきたたくさん人の顔が思い浮かびます。

### 湿原と市民をつなげるために

釧路湿原の取材を始めて1年ほど経ったころ、ふと自分の周りを見ると湿原に興味を持っていない人や、遊びに出かけている人が少ないことに気付きました。もっといういろいろな人に湿原に親しんでもらいたいと思うようになり、委員になった。釧路湿原自然再生協議会が「ワンダグリーンダ・プロジェクト」という事業を立ち上げ、湿原と市民がつながるさまざまな企画を実施しています。プロジェクト名は私が命名しました。国内最大の湿地で、国内で一番最初にラムサール条約湿地に登録されたので「ワン」と、英語で素晴らしいを意味する「ワンダー」、緑の大地を表す「グリーン」を合わせた造語なんです。

私も仲間たちとプロジェクトに参画しました。「釧路湿原『音』探検」という企画です。小型集音器を使って、鳥の声や虫の音など自然の中にある音声を聞きながら湿原を探検します。達古武湖畔で開催しましたが、車椅子の仲間が木道を散策できないなどの課題も浮上しました。足に障害がある仲間と一緒に夢ヶ丘展望台まで登ったこともあり。彼は、改修前の急な坂道やポロポロの木の間を一段を一段、大汗をかきながら上り、みんなで手をとり支えました。頂上にやっと到着し、釧路川が蛇行する雄大な湿原を目にした

彼は、「こんな景色は見たことがない」と涙を流さんばかりに喜びました。その場にいたみんながそう思ったことでしょう。

### 自然が持つ力を信じて

長年、釧路を拠点に取材活動をしています。2019年から2年間は札幌で勤務しました。自分で「自然が好き」と意識したことはありませんでしたが、札幌の都会で暮らした2年間は、無性に土の上を歩きたくなった。林や森を見付けると吸い寄せられるように足が向き、自分が自然を求めていることに気付かされました。

釧路湿原には好きな場所がたくさんあります。その一つは、釧路町の細岡カヌーポイントです。普段は人があまりおらず、静か。そこだけピンポイントで見ると釧路川がゆったりと流れる大自然がとても美しい。一方で、すぐ近くに線路や道路があり、人の暮らしか開発とも近い。そのアンバランスな風景が良くも悪くも釧路湿原を象徴しているように感じています。「開発されている中でも自然を保っている」という見方もできる。

例えば、直線化された釧路川の蛇行復元も、2006〜2010年に茅沼地区の蛇行が復元された当時は賛否両論あり、「公共事業の二重投資」という批判もありました。でも、今、再生された川や周辺を見ると最初からそうだったように蛇行していて、植生も再生しつつあるように感じます。自然自体が持つた



釧路湿原最奥部で取材中の佐竹さん





聞き書き  
原田香苗さん

## 地域資源であり、財産であり、尊い存在。 そんな釧路湿原を守るための観光業。



生まれも育ちも釧路市である原田香苗さんにとって、釧路湿原はただの何もない田舎の風景でした。不毛の地である湿原がラムサール条約と国立公園として登録されたことにより、開発をされずに守られ、残されていたことを、バスガイドを始めてから知り、尊い存在だと思ふようになりました。観光の仕事に携わって25年。バスガイドとくしろ湿原ノロッコ号(※)の乗務員として湿原を案内する経験を通じて、地域資源を守るための観光の重要性を感じ、次世代につないでいくための活動を続けています。

※釧路湿原の絶景や野生動物を車窓から眺めながら、ゆっくりと大自然を満喫できる観光列車。2025年度で運行終了予定。

はらだ・かなえ / 1978年、釧路市出身。高校卒業後、釧路町のバス会社にてバスガイドのキャリアをスタート。出産・育児での休職を経て、JR釧路支社にて受付業務を担う。その後、くしろ湿原ノロッコ号・SL冬の湿原号の客室乗務員を担当。再びバスガイドを経て、2019年に観光コンテンツ開発を手がける観光クリエイターとして独立。ボールペン画家としても活躍中。2024年、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院履修証明プログラム(DESTINATION・マネージャー育成プログラム)修了。

### 海の底に住んでいる私たち

釧路湿原はその昔、全部海の底だったんですよ。ロマンを感じませんか？海が引いて、乾かないで残っているのが湿原なんです。高校を卒業して、ガイドになって釧路について勉強をする中で、ここは何もないのではなくかつては海の底だったんだと知りました。

私は生まれも育ちも釧路市で、釧路湿原は常に身近にあったものなんです。ただの何もない田舎の風景だと思っていました。でも、何もないのは開発されていない単なる不毛の地ということではなく、国と世界から守られていたからなんです。ここは国内第1号のラムサール条約登録湿地で、国立公園でもあり、大事に守られているのだと気付いたとき、すごいところに私は住んでいるんだなと思って。実際にバスガイドをしながら全国から来る旅行者の方にその話をすると、「ガイドさんってすごいところに住んでいるんだね。私たちもすごいところに来ちゃったんだね」と言われます。高校生の頃までは都会に行きたいという憧れもあったんです。私は今、特殊な環境に住んでいるんだって気付いてからは、その魅力を釧路に訪れるたくさんの方に伝えていく活動をしたと思うようになりました。観光客の方に気付かせてもらえたおかげで、釧路から出るという頭はまったくなくなりました。

釧路湿原は、一言で言うと尊い存在だと思います。まず、これだけの規模で原始的な景

観が今も残っているというのはすごいことですし、特殊な環境に釧路市や釧路町などの街が作られて、日本一大きい湿原と都市が一緒にある。自然と共生している暮らしがここにかなくてはいけないと思います。道内だと湿原はあちらこちらにあり、東北海道には釧路湿原国立公園のほかに霧多布湿原、根室のほうへ行くと春国俗(しゅんこくぞく)もあります。ラムサール条約登録湿地が、広く連携しているエリアって、日本では道東の太平洋沿岸くらいです。大事にしなければいけないものがたくさんあるなと感じます。

### 観光に魅力を感じた原点

うちは学校を休んでも旅行に連れていくような珍しい家庭でした。そんな旅行1家で育って主に道内を巡りましたが、小学校6年生と中学生のときには親が先に東京へ行き、子どもたちだけで飛行機に乗って追いかけるスタイルの旅も経験しました。飛行機に乗るまでに、路線バスの運転手さんに助けてもらい、空港バスに乗るときにはバスセンターのお姉さんに助けてもらって、空港に着いたらスタッフの方に面倒を見てもらう。東京へ移動するまでに関わる人がいっぱいいるんですよ。もっと細かく言うと、飛行機が飛ぶときに最後に手を振ってくれるスタッフさんもうです。登場人物が多くて、こんなにいろんな仕事がある世界っておもしろいなと思っ

て。旅行移動に関わってくれるすべての人が旅の物語の一部なんです。物心がついた頃から、すごくいい産業だと感じていましたね。

旅って、そこで暮らす人たちにとっては日常なものも、来訪者にとっては非日常じゃないですか。ということは、自分が住んでいる町も誰かにとっては非日常なんだなと小学校低学年くらいから理解していました。常に自分の住む町を客観的に見ているので、釧路市は今でも毎日新鮮です。そういう視点の持ち方を学ばせてくれた親には本当に感謝していますし、観光に携わる仕事がしたいと思うようにもなりました。私は観光オタクなんです

よね(笑)。いつも観光客のことを考えながら、ここで暮らす人の日常を提供できる仕事ができたらいいなと考えていましたね。

### 観光列車だからこそ 生まれる旅行者との一体感

2009年、JR釧路支社案内受付業務をしていたときに声をかけられて、SL冬の湿原号の客室乗務員とノロッコ号のアナウンスをすることになりました。それまでバスガイドの経験があったので、釧路湿原の話をするのに抵抗はなかったし、新しいものに挑戦す







ノロッコ号

地が続くだけで案内しづらいなとずっと思っていました。都市部だと次から次へと案内するものがあるんです。湿原は自分で物語を見つけて語っていく必要があるレベルの高い地域で、ガイドさんの中でも鉦路は大変だと言う人も多くて。でもお客さまのおかげで見方が変わってきて、こういう深みをもっと勉強していけばいいんだという感じでどんどん案内しごたえのある場所になりました。鉦路湿原を案内できるのは幸せです。

湿原の中の観光開発をしなかったことがよかったんですね。鉦路湿原に来る方は、みんな湿原の中に入れると思っっているんですよ。鉦路川でカヌーができますし、木道がありますけれども、バスガイドをしているのもノロッコ号に乗っていても、「もつと湿原の中を走ると思っていた」と話されるお客さまがすごく多くて。「開発ができないエリアなので外側から見ることしかできないんですよ」と伝えると、「そうですね、大事にしないといけないですよ」と返ってくる。そういった「尊いですね」という気持ちになっていただけのやり取りができるのはガイドの魅力ですね。

湿原を守りたいと考えたときに、私は直接自然を守る活動はできないけれど、自然の大切さを伝えて大事にもらう仕事だったらできると思っています。観光というと、趣味や娯楽のイメージが強いのですが、地域づくりにとって大きく作用し、そのための観光研究も日々進められています。観光公害が強く目

立ち、「そんなに人に来てもらっても困るんです」と言われたりしますが、それは私たち観光業者も課題とするところです。自然を守るためのエコツーリズムの導入や、少人数向けや付加価値を高めた内容、一方でマストーリズムだから一気には担える自然・文化への理解、啓発というのでもできる。いたずらに観光呼び込みや開発をするのではなく、地域に合わせたツーリズムを、地域とプロが一体となり進めることが重要であると考えます。観光経済波及の創出は、町の規模・人口と関係がなかったりします。私が考えているのは、いかにその地域の資源や財産を守り育て発展させていくことができるか。特にこのエリアでは、鉦路湿原からの恩恵を尊び、得られる恩恵には観光資源も含まれており、観光経済活動は間接的ではあるが保全保護の取り組みにもつながるということを地域側・観光客双方に伝えていきたい。ひいては、与えられた環境のなかにある人々の暮らしが大切にされるようにしたい。私は観光を仕事にしていますが、一番大事にしているのは地域の人が本当に守りたいものが何かを理解し、一緒に守っていくお手伝いをする。そして、観光から得られる恩恵を説いていくのも自分の役割だと考えています。観光業は資源の上に成り立つ産業であり、地域の貴重な財産を守るためのものでもあるんですね。自分が今できることをして、次世代の子供たちにも尊い湿原からなるこの地域の暮らしをつないでいけたらという思いです。



と思う感じではなかったんです。ただ、難しいと思ったのが、トータル約50分の中で、車掌さんのアナウンスを加味しながら2分・3分・7分というように分けて喋らなければいけなかったこと。すごくテクニカルな仕事だと感じて、バスガイドにはないおもしろさがありました。伝える言葉を選ばなければいけないというのは、すごく勉強させていただきましたね。

最初の内は原稿を読むだけのやり方で、肉声案内だと気付かないお客さまがすごく多くって。見えないように陰になって淡々と話すスタイルだったので、テープを流している

と想像していたんですよ。それだけ正確というのですが、肉声の良さも出していただけだと考えました。全部暗記して人前に出て、そのときどきに合わせた案内をできるようにしようと思いました。バスガイドの1日何百キロ分の原稿を暗記すると思えば、ノロッコ号の正味40分の暗記量は別に苦ではなかったです。肉声で、その日その日に合わせた案内をしていることを知ってほしかった。景色を見ながら、シカが出てきたら「シカですね」という言葉を挟みながらのアナウンスに、少しずつ変えていきました。

するとお客さんと一体感が生まれるんですよ。沿線に「タンチョウが」「シカが」と合わせて喋ると、みんなが「右だ」「左だ」となるのでわーって盛り上がる。観光列車のいいところだなと思います。それは原稿を見ながらだと見落とししてしまうので。「タンチョウってどういう生態なんですか?」「今ご案内いただいた鉦路湿原ってどういうことなんですか?」「塘路駅に着いたらどこに行ったらいいですか?」などと、お客さまから声をかけられる機会も増えました。それで私も「どこから来たんですか?」「道内ですか?」「名古屋から来たんですか?」「道内ですか?」というところからまた交流が生まれて。みんな湿原を楽しんでいるという感じになるのがたまらないですね。

列車だと、周近で鉦路川の蛇行を見られるのが魅力です。最近、エゾシカが5、6頭、露天風呂のように浸かっている沼があるんで

すよ。いつもです。最初見たときは、見ちゃいけないのを見たと思ってびっくりして。3回くらい見て、溺れてないなっていう確証を得てからノロッコ号でアナウンスするようになったんです。調べるとシカは沐浴する生き物で、ノミやダニを取るために沼に入っています。それって車やカヌーからは見えないんですよ。鉄道ならではの景色です。毎度沐浴しているし、私たちもおもしろくて案内しています。しかもエゾシカたちがみんなこっちを向いてくれるんですよ。

湿原を長く定点観測しているので、感じる変化もあります。昔から知ってお客さまには、「景色が見えにくくなった」とよく言われますね。バスガイドを経てノロッコ号30周年時に復職したとき、確かにこんなに葉っぱや高い草はなかったかもしれないと気付きました。温暖化などの影響で乾燥が進み、植生が変わってきているのではと感じます。動物の出るポイントも変わってきました。以前はいつも岩保木水門のところにエゾタヌキファミリーがいて、鉦路湿原駅に着くとエゾリスさんたちがいて見せ場になっていたので、どちらもないなくなっちゃった代わりにタンチョウファミリーがいつも出てくるようになりました。今年はひなが生まれたとか、今日いないということは川へ行っているのかなとか、子供が今年も巣立っていったなというのがわかりますね。いつも同じ線路を同じ時刻で走っているの、ノロッコ号で定点観測できるのがおもしろいです。

正直、バスガイドを始めた当初は淡々と湿原の中を観光開発しなかったことで守られたものがある

鉦路湿原ってとっても広いので、見る角度によって全然違う景色が楽しめるんです。私はバスガイド出身なので、バスルートがある西側の案内から始めていきましたが、鉦路の街並みがあったり湿原があったりで強弱がある。それは車やバスからの景色ならではなく。東側は鉦網本線からの風景で、先ほど話したように道路からは見ることのできない川の蛇行や、エゾシカの秘密のお風呂。北側は標茶町の海跡湖であるシラルトロ湖から見ると、やっぱりここは海の名残がある湿地帯で、水鳥たちの聖地でもあるということがわかります。





聞き書き  
照井滋晴さん

## 知れば知るほど「わからない」が増えていく キタサンショウウオに魅せられて



学生時代に NPO を立ち上げ、絶滅危惧種で「湿原のサファイア」とも呼ばれる卵のうを産卵するキタサンショウウオの調査研究や保全に取り組んできた照井滋晴さん。近年は、太陽光パネルの設置が増加しつづける釧路湿原周辺で、キタサンショウウオをはじめ動植物の生息域を守るべく、土地を購入して保護地とする活動にも励んでいます。飄々とした佇まいに潜む、キタサンショウウオへの情熱と、「こんな場所は他にはない」と評する釧路湿原への思いに触れました。

てるい・しげはる／1983年、札幌市出身。北海道教育大学釧路校大学院在学中に NPO 法人環境把握推進ネットワーク-PEG を設立。絶滅危惧種で釧路市・標茶町の天然記念物に指定されているキタサンショウウオやニホンザリガニなどの保全活動を行うとともに、フィールドワークなどを通して地域の子供たちに釧路湿原の理解を広めている。釧路市都市計画審議会委員、釧路湿原自然再生協議会生態系再生小委員会の委員長を務める。

### 釧路湿原だからこそその生き物

僕は札幌出身で、比較的、山に近い地域に住んでいた人で人並みに昆虫やザリガニとりなんかもしていました。もともとは特に生き物好きだったわけではないんです。ただ、友達が家のバケツで飼っていたサンショウウオがなんだか非常に印象的で、ずっと記憶に残っていました。そんな生き物と今こうしてつながっているのは不思議です。

高校を卒業後、教育大（北海道教育大学釧路校）への進学で釧路に住み始めました。理数系が得意で、その中でも生物に興味があったので、将来は理科の教員になろうかなと思っていました。バドミントンもやっていたし、部活で指導するのもいいな。でも結局、教員にはならなかったんです。在学中に、他の選択肢が見えてきました。

釧路は札幌と比べてずっと寒く感じました

ね。今よりも霧が多くて濃かった気がしません。良くも悪くも都会ではなく、かといって寂しくもなく僕にとってはちょうどいい雰囲気、のびのび暮らせました。四六時中、一緒にいるような仲間もできて彼らの研究活動にも感化されましたね。

釧路湿原を初めて見たときは、こんなにも「なにもない」土地が広がっていることに驚かされました。人工物が見当たらず、立ち入ると地面がふかふかして。当時は、湿原にどんな価値があるのかもわかってなかったです。

卒業研究のテーマを探していたとき「どうせ釧路に暮らしているんだから、ここだからこそその生き物を取り上げたい」と思って、いろいろ調べた末に、釧路湿原のキタサンショウウオに辿り着きました。タンチョウヅルと違ってマイナーな存在なのが、逆にいいなって。あまのじゃくなんです。メジャーでは

ないからこそ研究者自体が少なく、僕にとってはラッキーでした。

キタサンショウウオはゆるゆるしているイメージがあるのか、なんとなく人から毛嫌いされているように感じますが、すごく小さくて、動き一つ見てもかわいらしいんですよ。特に見てもらいたいののは卵。光を反射して青く輝いて、きれいですよ。すごく神秘的。初めて見たときは感動しました。キタサンショウウオは近年だと十勝の上士幌町でも発見されましたが、国内の主な生息地は釧路湿原で、研究を行うフィールドとしてとても魅力的な場所だと感じています。ロシアなど北方に広く生息しているので、あまり暑さが得意ではないのですね。釧路湿原は道内でも冷涼な気候なので、彼らが残るべくして残った地なのでしょう。

### わからないからこそその魅力

釧路湿原は、キタサンショウウオが産卵するのに適した水場と、繁殖期以外に生活する乾いた陸地がそろって、彼ら両生類にとって絶好の環境なんです。かつ、目立った天敵もない。ほとんどの時間を陸地で暮らしているんですけど、まず人目に付かないですね。カエルと違って鳴かないですし、跳ねないですし。繁殖期に水中にいるときは見つけやすいですが、陸では全然動かないので見つけづらいんです。

キタサンショウウオがかわいかった？



キタサンショウウオの体長は12センチメートルほど

まあ20年以上も研究しているので愛着はありますね。環境保全の指標でもあるし、好奇心がくすぐられる研究対象ですね。いまだに謎が多いんです。わかった分だけ、わからないことも増えていく……そこが魅力でもあります。僕は何事もそうなんです。わからないからこそ調べ続けてしまう、始めちゃうと止められない性格なんです。人間に対しては、そこまで掘り下げたいとは思っていません。

大学の卒業研究にあたって、まず近隣でキタサンショウウオの調査や研究に携わっている人を探したものの、全然いなかったんですよ。その後、奈良県の大学の先生が研究し





キタサンシヨウウオと卵のう

ているとわかったので連絡してみたんです。そうしたら、先生がキタサンシヨウウオの調査で鉦路に来る流れで、調査フィールドの一つに立ち入らせてもらえました。標茶町の塘路にあって、春先から雪が降り始めるまで毎月1週間くらいのペースで通いました。それ以降も先生の調査に同行したり一緒に論文を執筆したりと、キタサンシヨウウオの研究を続ける中でお世話になっていて、大切な方です。人との出会いに恵まれていたと思います。当時は今と違って大学が厳しくないもので、どこに行こうと文句は言われなかった。ヤチマナコ(※1)にも何回か落ちたことがあります。

大学院に進んで、また2年間、キタサンシヨウウオの研究をするんですけど、やはりわからないことはわからないまま。まだまだ研究を続けたいけれど就職はしなきゃならないし……という状況で「それなら調査や研究をそのまま仕事にするのがいい」と、深く考えずNPO法人を立ち上げました。当時、学校や一般企業に就職する同級生が多いなか、そんな選択をしたのは自分くらいでした。今はあまり珍しくもないでしょうね。いわゆる「社長」になりたかったわけではなく、やりたいことを続ける手段として、その道を選びました。幸い、当初から環境省や自治体からの環境調査などで仕事をいただけましたが、若い人が同じような道を歩もうとしたら大変なので止めますね(笑)。こんな、大学卒業したての人間に仕事を与えてくれたり、地域の自然保護関係のNPOの方々も寛容で、湿原のことを話していいです。

とを教えてください、人に恵まれて、支えてもらいました。

**好きなものを守りたいだけ**

2015年くらいから、鉦路湿原にキタサンシヨウウオの調査に行ったら、生息地がいきなり更地になっていたり、植物が刈り取られているという状況がポツポツ出てきたんです。太陽光発電施設のために土地が事業者にどんどん買い取られていたんですよ。そうすると当然キタサンシヨウウオの生息地が減っていくわけです。それで2023年から、メガソーラーの建設予定地に重なるような、キタサンシヨウウオの生息適地を購入し保全する活動をしています。

天然記念物なのになぜ、こんな状況になるのか。希少な生き物ゆえに、保護する側は一般の方に対して、どこにいるのか教えられなかった背景があります。その結果、情報が行き渡らずキタサンシヨウウオが「いないもの」として扱われて、土地の所有者も「ここは私有地だし、業者さんに売ってもいいでしょう」という話になってしまふ。

鉦路湿原は、国立公園外だと私有地が非常に多い。しかも市街地と違って湿地なので宅地化もできず、経済的な価値が低い。そんな使い道のない土地を「地球温暖化抑制のため再生可能エネルギーの発電所にした」と言われたら、当然売ってしまう。動植物の生息環境の消失や景観の悪化は免れないけれど



ど、土地の所有者が責められることではない。国立公園外にもいい自然はいっぱい残っているのに、太陽光パネルがどんどん増えてく……地域で湿原に関心のない人が多いせいとか、その変化の重大さに気付くのはだいぶ遅かったんじゃないでしょうか。正直に言えば、僕はキタサンシヨウウオの調査さえできれば満足なのですが、そのためにはやはり鉦路湿原を守らなければならぬ。それまで興味がなかった太陽光パネルの問題にも取り組まなければならぬ。そんなわけで、太陽光発電施設の用地として売り出されている土地を調べては、所有者さんに理解いただきたいうえで、土地を取得しています。売る側も買う側も、誰もが損しないかたちで自然を守るのが一番です。

僕個人で買える土地はわずかですが、そういった活動が全国ニュースで報じられてようやく湿原での太陽光パネルの増加やキタサン



イベント参加者に外来生物についてのレクチャーをしている様子

シヨウウオの危機的な状況が爆発的に広まりました。今は地域の方が自分たちで考えて、政治の場にも意見として挙げられているのはいいことだと思えます。でも、早くこのような活動を必要としない状況になってほしいですね。活動を通して、同じ思いの仲間や手を貸してくれる方が増えました。結局いくら自然保護を訴えても、アクションを起こさなければ説得力は生まれません。現在は、こういった活動への理解も深まり、鉦路市内でナショナルトラスト運動(※2)に励む団体に土地を寄付する人も増えていて聞いています。別に湿原がどうなる方が「自然を守れ」と言われようが、自分の生活に直結しないとピンとこない人が大半だと思うんですよ。ときどき、湿原を守る必要性をできるだけわかりやすく説明しようとしてもうまく伝わらないときはイラツとして「僕がキタサンシヨウウオを好きだから湿原を守るんだ、好きなものを守りたいだけでなにが悪いんだ」なんて思ったりもするんですけど(笑)。

**どこに行っても戻ってくる場所**

NPO法人を立ち上げたきっかけの一つとして、地域の環境教育に携わりたいという思いがありました。鉦路市民でも鉦路湿原に行ったことも見たこともない、自然に関心もない、という人が少なからずいて、残念に感じています。身近にあって当たり前だからかもしれません。札幌に住む人もみんなが雪ま

つりに行くわけではないです。ね。

鉦路湿原のような場所はほかにはないよ、ということを知ってもらいたいです。学校教員でなくとも社会教育の場で伝えることはできるので、キタサンシヨウウオの調査研究を通して得た経験や知識を、地域の子供から大人まで還元して、湿原の魅力を知る人を増やしていきたい。

鉦路湿原の魅力を一言で伝えるのは難しいんですよ。パツと見、なにもない原っぱです。だからね。その「なにもなさ」こそが魅力なんだということも、ある程度、歳を重ねないと伝わりづらいですから。他にいろんなものを見て戻ってくると、わかります。地図を見ても鉦路がどこなのかおぼろげだった若かったころと今の自分では、見え方が全然違いますね。写真1枚を見ても、そこにどんな動植物がいるのか想像を巡らせたり、経験を積むごとに解像度がぐんと上がります。

これまでの環境教育活動で反応が良かったのは、やはりキタサンシヨウウオの観察会ですね。夜に湿原に入っていくと、繁殖のために集まったサンシヨウウオたちが池の中で泳いでいるところや、懐中電灯を当てて卵が光っているところを見せると、子供も大人もみんな、歓声を上げてすごく盛り上がってきます。僕の企画力ではなくキタサンシヨウウオの魅力が、そうさせてくれるんですよ。

鉦路湿原は日本でも有数の観光地にもなっているだけでなく、地球温暖化を防ぎ、防災機能もある。だからこそ湿原はとても重要で、

守らないといけない。そして湿原を守ることがキタサンシヨウウオを守ることにもつながるんだ……という話をするのが、最近はとでも多いです。みんなの生活を守るために湿原を守ろうという話をしつつ、結果的にキタサンシヨウウオに愛着を持ってもらえるように誘導して(笑)。

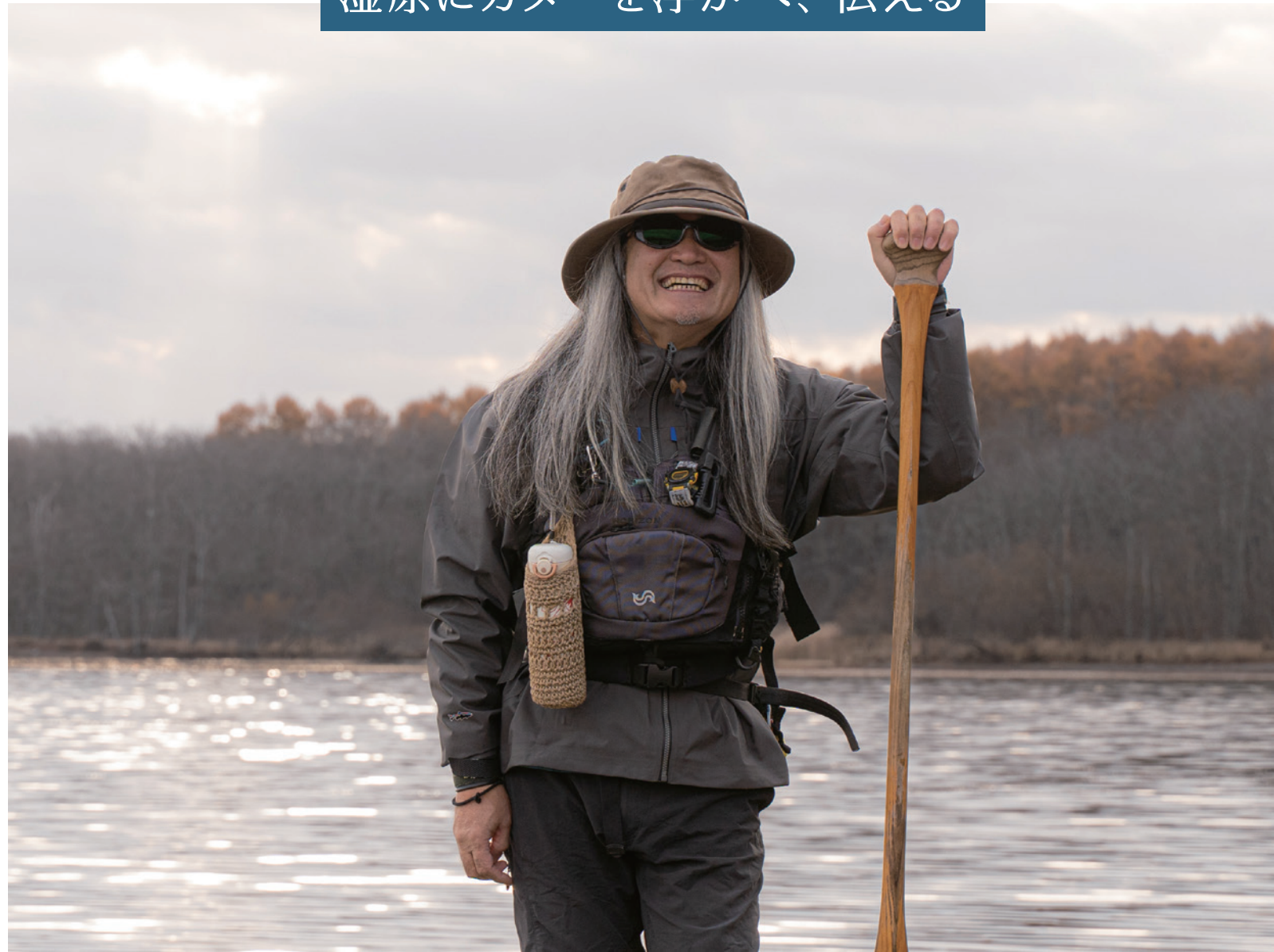
目標は、少なくとも僕が鉦路湿原に関わっている間はキタサンシヨウウオを絶滅させないこと。そして、1人でもいいので同じようにキタサンシヨウウオの調査研究や保全に励む人に出会えること。今、若い人に候補がないんですよ、困っています。それが課題ですね。鉦路湿原は、僕にとって家みたいなもの。大学時代から20年以上、湿原なしには人生を語れないです。鉦路湿原以外のいろんな地域にも調査などで行きましたが、そこで身につけた知識や経験はすべて湿原での活動につながっています。どこに行っても必ずここに戻ってくる、そんな場所です。

※1 湿原の中にできたつば型の沼  
※2 環境保護などを目的に土地などを購入し、自主的に管理する市民活動



聞き書き  
小川清史さん

## 旅の果てに辿り着いた塘路で 湿原にカヌーを浮かべ、伝える



初めての1人旅が小学生の頃、それも北海道での大冒険を経験したという小川清史さん。鉄道や流氷に魅せられて北海道への旅を繰り返すなかで、たまたま塘路を訪れ、湿原やカヌーの楽しさを深く知っていきます。都会で音楽業界に携わる暮らしと、静寂に包まれた湿原にカヌーを浮かべる旅。まったく異なる2つの時間のなかで、人や機会と巡り合い、導かれるように塘路へと移住した小川さんに、その道のりと湿原への思いを伺いました。

おがわ・きよし／1964年、東京都生まれ。10代から音楽業界に携わり、1985年に結成したバンド「RED WARRIORS」のベーシストとしてデビュー。89年に解散後も活動再開と休止を繰り返しながらアルバムのリリースやライブを行う。その間、幼少期より訪れてきた北海道への旅を重ね、カヌーガイドとしても活動。2004年に標茶町塘路に移住し、「とうろの宿」を開業。音楽活動を続けながら、旅人たちに釧路湿原の魅力を伝えている。

### 旅の途中で偶然訪れた塘路の 人生を変えたカヌー体験

20代の頃に自分が何してたとか、正直、あんまり覚えてないんだよね。10代からずっと音楽の仕事をしていたので、練習とか演奏とか打ち合わせとか、そういう日々ですよ。デビューしたのが21歳くらい。塘路と出合う30代半ばくらいまで、ずっと音楽業界しか知りませんでしたね。

塘路に初めて来たのは1998年。34歳だったかな。本当に偶然なんです。北海道のユースホステルによく泊まってたんだけど、ちよつと静かな宿はないかなって探したら、塘路にできたばかりのユースホステルがあるぞって。こっちはもうは来たことがなかったから予約したんだけど、その前に泊まっていた宿で飲み過ぎちゃってね。塘路にはキャンセル料を払うために来たようなもんだよ。その宿のオーナーがね、春になったら塘路に「水の旅人塾」というのが開かれて、カナ

ディアンカヌーの作り方を教えてくれるから、そこでカヌーを作ったカヌーツアーをやりたいんだって言うんだよ。それ、おもしろそうじゃん。「じゃあ時間があったら手伝いに来ますよって言って、僕は本当に春に戻って来たんだ。

カヌーには乗ったことがなかったんだけど、乗ってみたいから「水の旅人塾」でカヌー作りを手伝ったの。そうしたら作り方を教えてくれた人が、「乗ったことないのに手伝っていいのか。じゃあ乗りに行こう」って、カナディアンカヌーで春の釧路湿原に連れて行ってくれたんですよ。

もうね、素晴らしかった。まだヤナギがほとんどなく緑になってきたような新緑の時期で、アレキナイ川に春の日差しが降り注いでた。カヌーはエンジンがないから、音がしないでしょ？水の音と、鳥の声しか聞こえない。本当に静かなんだよ。そんななかで、タシカが歩いていたり。

その体験があまりに強烈でね。すごいなあって、ショックでした。それから「お前の分も材料あるから作っていけ」って、自分のカヌーも作るようになった。作ったら一生懸命、カヌーの練習するじゃない。なんとかカヌーガイドのまね事みたいにはできるようになって、宿の手伝いでお客さんを乗せたりして。結局その年は、5月の連休明けくらいから11月までずっと塘路に居たんですよ。

### 幼少期の原体験と 何度も通った北海道の記憶

僕は東京で生まれて、育ったのは埼玉。子供の頃は家の周りに田んぼがあって、けっこう自然のなかだった。小学生ぐらいからフォークギターを弾き始めて、中学生でペーソスを弾くようになった。それからもう、基本的にバンドばかりでしたね。ほかに唯一、続けてたというか、好きだったのが、北海道への旅です。

僕、北海道との付き合いは長いんですよ。初めて1人旅に出たのが小学校5年生のとき。当時、蒸気機関車がまだ北海道と九州にだけ走っていたので、見に行きたいと思ってた。それで4年生のときに親に北海道へ行きたいって言ったら、5年生になったらいいよって。1年経てば忘れられると思ったんじゃない？

僕はその1年間、頭のなかで旅の経路をずっと考えてたわけ。それでいざ5年生になったら、親も心配になったんでしょね、

函館にいる叔母のところなら行ってもいいという条件がついてきました。

上野駅から夜行列車に乗って青森まで行って、青函連絡船だよ。その船が着く港の真向かいで、叔母は食堂をやってたんですよ。海の上にせり出しているような造りの家だね。その家にいた1月くらいの間、社会を見たというか、いろんな経験をしたよね。

「早朝早めし」っていうのれんが出た叔母の食堂には、函館のドックで働いている人たちが来るんだよ。港に入れない船に物や人を運ぶ通船屋さんっていうのがあって、そこにラーメンなんかを運ぶのを手伝ったりしてた。その人たちが船に乗せてくれたり、釣りをする防波堤まで連れて行ってくれたり。毎日、朝から晩まで行き交う青函連絡船とか、停泊してた南極観測船を見て。函館の市電も今より多くてね、港まわりの日は花電車が走ったり火花が上がったりして、にぎやかでしたよ。まるで映画のなか、寅さんの旅に出てくるような昭和の景色が、今でもはつきり記憶に残ってますね。

それから、中学校2年生のときにも友達と北海道を旅行した。お金がないから毎晩、夜行列車に泊まりながら移動する「オール車中泊」の旅ですよ。3年生で初めて冬の北海道で流氷を見て、それからもう冬しか来なくなつたね。流氷の写真を撮りたくて。

高校生になったらユースホステルに泊まる旅。当時は大学生がよくそういう旅をして、ギターを弾いてみんなで歌ったりするんだ







photo by Mariko Miura

## 塘路で過ごした時間が 気付かせてくれたこと

塘路でカヌー作りをして、宿のカヌーガイドスタッフとして手伝いみたいなことをして、半年くらいの間、いろんな人と知り合って、湿原について教えてもらいましたね。この鳥はどこから来て、こんなふうに暮らして、どこへ帰るとか。植物のこととか、魚のこととか。地元の人とも親しくなった。アイヌのトッコリという楽器をやる人にアイヌ音楽の話の聞いたり、小・中学校の運動会を手伝ったりもしましたね。

僕は10代から音楽業界というただ一つの世界で生きてきたんですよ。塘路でそんなふうな過ごし方によって、初めて違う世界の存在に気が付いた。いろんな職業の方たちが宿に来て、いろんな話をするわけですよ。30代半ばにして、いろんな人がいる社会のなかに自分が生きてるんだってことを感じましたね。

その旅を終えて帰ったときに、僕はもう音楽じゃなく、何か違うことをしようと思ったの。でもね、シヨックだったのは、僕の場合はずっと音楽しかやってないわけだから、職歴がないようなもんなんだよ。音楽の世界から出ることで、仕事がないっていう現実を知った。一つのことをやってきたことに後悔はないんだけど、社会に順応していくっていう意味でいうと、ちょっと問題が起こってくるんだよね。

たまたま映画のロケバスの運転手の仕事を

見付けてね、日本中を回りながら、長期の休みには塘路に……というか、湿原に来るという生活をしましたね。

湿原って、知らないことがいっぱいあって、理解するのに時間がかかる。北海道観光っていうと富良野の花畑とかき、広い酪農地帯とか、そういうイメージでしょ？わかりやすく広々として、気持ちのいい景色。

それに比べて湿原って、良さを感じるのには感性が必要なんだよ。見た目はただの草っ原だからね。高くない山に囲まれた土地に、湖や沼が点在して、一筋の川と一筋の鉄路が通って。派手さはないんだけど、唯一無二の存在に思えるんだよね。

人は変わっていくし、亡くなってしまったりもするけど、湿原はずっとここにある。そんなところにも魅力を感じてるんじゃないかな。

## 一番住みたい町に暮らし、 ガイドとして伝え続ける

実は僕、移住は否定派だったんですよ。若いときから北海道を旅してるでしょ。でも旅行で来るからいいわけであって、住んでしまったら、その輝きは違うものになるって思ってたの。僕にとってそれくらい大切なフィールドだったから、失いたくなかった。

ところが、30代でいろんなことが重なってね。音楽の仕事から離れたら、父が亡くなった。そんななかで、「自分が住みたい所に住む」という究極の贅沢を試してみようか



なって、なんとなく思い始めたんだよね。せっかくなら一番住みたい町がいい。それが塘路だった。

でも、なんか塘路の人たちには言いづらくてね。勇気を出して言ってみたら、「おお、いいじゃん」と。住むとなったら地元の人たちのおかげでとんとん拍子に土地が手に入っちゃった。土地を買ったら、何か建てたくなるじゃない？それで、渋谷でたまたま見付けたこのドームハウスがいいなって、買っちゃったんだよ。それを建てるのに合わせて仕事を辞めて、塘路に移住してきたんだ。

それから宿の事業計画書を作るのに四苦八苦して、それも地元の人に助けてもらってさ。「とつろの宿」をオープンして、アウトドアガイドの資格を取って、カヌーガイド業をするようになったんだよ。

34歳のときに初めて塘路に来て、移住したのが38歳。もう、勢いだよね。人生を変えるときだった。やろうと思ったら、意外とでき

ちゃうんだよね。それからもう20年以上ですよ。湿原の静けさとか、夕焼けや朝焼けの美しさはずっと変わっていかないんだけど、移住した頃と比べると、植物とか鳥の種類がちょっとずつ変わってきたんだよね。アオサギばかりだったのにダイサギが多くなったとか、アヤマヤカキツバタが見られなくなってきたとか。地球規模のことかもしれないし、地域の問題かもしれない。原因はわからないけど、顕著に変わってきてる。

僕が塘路に来る前の時代は、ラムサール条約や国立公園の話で釧路がワーツと沸いたわけ。官民そろって熱心だった時代があった。それから時が経ってしまっって、地元の意識が希薄になってきたというのがあると思う。

僕は自分がこれからどうしたいというよりも、どうやったら今の湿原をこれ以上劣化させずに次の世代に残せるのかって、そんなことを考えるよね。



とつろの宿

そしてやっぱり、地元の人が湿原を愛してくるようになってほしいよね。静岡や山梨の人が富士山を自慢に思うように。湿原を誇りに思えるような地元であってほしい。移住者のほうがそういう魅力に気付きやすかったりして、どうしても乖離はあるんだけど、「灯台下暗し」なんだと思う。

少なくとも僕は、20年経って地元といえるようなこの釧路湿原に出会えた。その魅力を伝えられるガイド活動を続けていけるのが、幸せなことだと思う。





聞き書き  
澁谷雄太さん

## 河川への土砂流出を防ぐことが、 湿原を守ることにつながる。 山のための間伐で自然を保護していく。



環境保全の重要な役割を担う産業として、林業があります。「森林組合にいたれば湿原のことは無視できないし、常に気を付けないと、という意識でいて。湿原に土砂流出はありえないですからね」と澁谷さんは語ります。釧路湿原に流れるいくつもの河川の上流には豊かな森があり、その森を守ることが湿原の生態系を保護することにつながっているのです。湿原の保全と切り離せない森の管理について、鶴居村森林組合の澁谷雄太さんに話を聞きました。

しぶや・ゆうた / 1989年、鶴居村出身。中学卒業後、釧路市内の高校へ通うために地元を離れ、下宿生活を送る。高校卒業後、農機具の修理・販売を行う会社へ入社し、道北の豊富町で暮らす。成人式をきっかけに地元へ戻ることを決め、鶴居村森林組合へ転職。現在は業務課長を務め、山の所有者と連携を取りながら山の管理を行う。妻・3人の子供の5人家族。

山の土壌を痛めないことが、  
湿原の環境保全にもつながる

林業が担う環境保全の役割ですか？河川への土砂流出を防ぐことが大きいと思います。鶴居村には湿原へ入る川の本数が多く、その川上に山がある。土砂流出以外にも、ネズミによる苗木被害に対しての駆除があり、山の中を歩きながら手で薬の散布をしています。2000ヘクタールくらいあるんですよ。昔はヘリコプターで一気にかまいていたんですけど、河川が近いからという理由でやめました。ヘリだと風があるから確実に狙ったところに落ちるかはわからない。細かい部分ですが、河川への影響を重要視しています。うちが、湿原の近くで作業することはないけど、森林組合にいたら湿原のことは無視できないし、常に気を付けないと、という意識でいて。湿原に土砂流出はありえないですからね。鶴居森林組合としてのこだわりは、将来木の取り組みに力を入れていること。山の土壌を痛めないようにという考え方で。一般的な間伐をするときは、枯れている木のような悪い木を切ることがほとんどなんですけど。そうじゃなくて、将来的に価値が出そうという木を見定めて、中心にした上で邪魔になっている木を切っていく。だから残している木の中には枯れているものもあるんですよ。けど、枯れているからって生態系に悪い影響を及ぼすわけではないじゃないですか。枯れた木に虫が入ると、その虫を餌にする鳥もいる。

でっかく穴が開くとフクロウの巣とかになるので、動物たちにとってのすみかにはちよいどいいと思います。そんなことも考えながら木を切っているのがこの森です。

この森では定性間伐という方法で伐採しています。一つひとつの木を見極めて切っていく方法です。安全性や作業性を重視して直線上に木を伐採する列状間伐という方法もあるのですが、山にとって一番理想の形は、定性間伐なのじゃないかなと思っています。

自分の仕事は山の管理です。山の所有者さんと話し合いながら、どんな山を作っていくか、ここに木を植えようなどと相談しながらやっていくという感じですかね。その後、実際に現場の指示を出したり、補助金の申請もやります。トラックに乗ったり木を切ったりはしないけど、標準地を作ったり木の樹齢や樹高、木自体が混み合っていないかななどを確認しながら伐採率を決め、どの木を切るか指示をして。そして切った木を所有者から買い取り、運搬業者と打ち合わせして運びます。

まずは地域の人が

湿原に興味を持つこと

自分たちの生活と湿原が

どうつながっているか伝えるべきでは？

湿原に近くなればなるほど、鶴居の地区だとナラの木が多くなっています。天然林とひとくくりで考えられてますが、その中にもいろんな種類がある。ハンノキ、シラカバ、

ヤチダモなどですね。川上だと樹種が変わって、カラマツが増えていく。土壌も変わってきますね。川上側は阿寒寄りなので、火山の噴火による赤土。岩も目立ちますね。湿原の方だと黒土が多いです。鶴居村の中でも場所によって土壌が違います。それは生えている木で判断できる場所もありますね。

自分は鶴居で生まれ育っているけど、湿原に行くことはほとんどなかったですね。正直、子供の頃は湿原がどうこうと考えることはなかった。これが普通だと思っちゃいましたよね。生えている木に関しても、「これがカラマツですよ」と言われてもわからなかったし、興味もなかったです。

中学を卒業後は家を出て、釧路市内で下宿生活をしました。高校を出て豊富町で働いていたんですけど、成人式で帰ってきたときに

たまたま森林組合で人の募集があった。いいタイミングだったので戻ることにして。成人式に出ていなかったら、戻ろうと思うことはなかったですね。戻ってきて、札幌出身の妻と鶴居で暮らし始めました。今、子供は3人いますね。全員男です。上2人は、自分と同じで野球をやっています。今年までコーチもしていたので、土日はずっと野球の練習をしていましたね。こっちは戻ってきて今年で17年になるのかな。いいところだとは思いますが、自由な生活ができています。

自分らのときは学校や周りから湿原の大切さなんて教わったことがなかったと思います。「釧路湿原が日本で一番でかいんだよ」と言われても、ああでかいだけか、で終わっちゃいますよね。そうじゃなくて、湿原があ





るから地域の人がこういうものをもらっているんだよっていう利益と言ったらおかしいけど、そういう恩恵がわからないと興味を持っていない。自分たちの生活と湿原がどうつながっているか、そんな話をする必要があると思います。地元の人にとっては湿原がある景色が普通だから、そもそも大して気にしてないですよ。

まずは湿原が貴重なものだとかわかってもらった方がいい。いろんな考えの人がいるから、足並みそろえて何かやろうってなかなか難しいじゃないですか。だけど、湿原があるから恵まれているんだよっていう感覚に地域の人になってくれるといいのかな。気持ちの問題。行動を促すのは難しいから、まずは興味を持ってもらうところからかなって思いま



す。ここに住んでいて空気がおいしいなんて思ったことはなかったけど、戻ってきて長いこと暮らして年をとっていくと気づくこともあって。この仕事をしていると、景色がいいところも見つけますよ。誰も行かないスポットもあるし。豊富町から戻ってきたときは、「ああ、山がこんなふうに見えていたのか」と思ったりもしました。20代前半の若いときに「いいところだね」って言うのは、都会から移住してきた人。道内で自然に溢れているところに暮らす人はそんなふうには思わない。若い頃にはわからないですよ。コンビ二近くはないから不便だな、とかそんな感じでしたよ。

湿原に興味がないからこそ何もわからない。山の森林自体が大事なものだとかわかるだけでも、行動が変わると思うんですけどね。例えば、湿原近くの道路脇はゴミがすごいですよ。何も考えずに捨てちゃう人がいます。でも大事なもので守らなければいけないという気持ちが生まれれば、ゴミなんて捨てないですよ。

### 元の姿に戻すために 森林を増やしていく

山の環境を悪くしようと思えばなんぼでも悪くできます。今の現状を残すことが一番難しい。今生えている木や植物、山になっているところを崩さないように維持していかないとどこかで崩れてしまうと、壊すのは簡単な

ので。山なんて1年2年でもと通りになるものじゃない。自分が木を植えたからといって、切るところまでは見れません。40年先、50年先の話になるので。次の世代に受け継ぐことが、組合の職員としての責務ですよ。ちょっと受け継がれたものが絶対ではない。気候などのいろんな変化に対処できるように、時代に合わせて柔軟に変えていかないと。全部そのまま受け継ぐだけだと古い形のまままになってしまう。

内地(※)のほうでは土砂崩れが毎年ありますよ。主にスギやヒノキが生えています。林内の土壌に陽が当たらなくて根元の土壌が真っ暗なんです。ただ、スギ・ヒノキは密集させて育てる必要があるので難しいんだと思うんですけど。今回案内した森は、

います。ここ数年で農家さんも少なくなり、離農する人も多くなっています。村や農家さんの理解もあって、昔の姿に戻そうとしています。だつてもともと森ですからね。今後、畑を森に変えたいという農家さんもいますよ。木が増えたら二酸化炭素の吸収源が増えるし、河川も変わってきますよ。植えた方が土砂流出がしづらくなるので重要です。

先ほど案内した村の土地は、手で植えています。土が付いたままのコンテナ苗を1人当たり400〜500本くらい。売っている野菜の苗でポットに入っているのがあるじゃないですか。その木のバージョンです。木の種類も違って、道路を挟んで片側にカラマツ、もう片側はクリーンラーチです。クリーンラーチは、わかりやすく言うとサラブレッド的なもの。カラマツだと成長は早いけどネズミなどにやられちゃうから、ある程度品種改良をした最先端の木ですね。二酸化炭素の吸収率も他と比べると大きいです。

一生生えている木なんてない。ほついたら絶対枯れますから。寿命が来る前に見極めて木を計画的に切っていくことが、自然保護の面でも大事なことです。山の所有者さんからしたら経済林になるので利益になる。お金になった方が興味を持ちますよね。お金になるから少しづつ森を増やそうよ、というのも興味を持たせる手としてはありかなと思います。それと、林業だけでなく他の産業に関わる人たちが助け合っていくことが大切かなと考えています。たとえば鶴居村の大事な産業に



ササとかが木の根元に生えているじゃないですか。それらの根っこだけでも土砂が流れたりするのを防ぐ役割があるんですよ。ただ、そのためには暗いとダメなんです。モヤシと一緒にですね。陽を当てなかったら白くなるけど、当てたら緑になる。山も同じで、暗くしてしまうと下草が生えてこないんですよ。そうすると地盤が土と木の根っこしかないからゆるい。間伐をすると木も太くなり、その空いているスペースに陽が入って、ササなどの違う種が生えてきて土壌を強くする。そういう部分が土砂流出の理由だと思います。

今鶴居では山を増やしています。減らすのは簡単だし、木を切って植えるだけでは増えない。じゃあどう増やしているのかというと、放牧地や畑として使っていた土地に植樹して

観光業があります。なので、景観を考慮しながら木を切ることも意識します。やらなきゃいけないものはやりますけど、変に目立って観光の邪魔になるようなことをしないようには心がけています。ただ、そこは所有者さんあつての話なので難しいこともあります。切った方がお金になりますからね。だけど、「なんとここは全部切らずにこういうふうに切っていく」と提案する。「湿原もあって観光も大事だから考慮しようよ」と話していくのも組合の大事な仕事です。産業全体が良くなければ鶴居のためにならないですからね。

※北海道の方言で、北海道からみた本州地方のこと





編集後記

広大な湿原、蛇行する釧路川、そしてそれを育む深い森、誰もが思い描く釧路湿原の姿。その風景が今も変わらず残されているのは、数えきれないほどの人々の思いや行動の積み重ねによるものです。本誌では、湿原とともに生きてきた人々の声を通じて、釧路湿原が「ヤチ」と呼ばれた時代から「地域の宝」となり、世代を超えて受け継がれ続けていくストーリーを紡ぎました。

釧路湿原の保全が始まったのは、自然を守るという明確な意志が芽生える前のことでした。湿原に通い、調査を重ねた人々は、そこに新しい発見があることに心躍らせ、「おもしろい」という純粋な気持ちで湿原と向き合いました。そうした探求の積み重ねが、やがて「この場所を守りたい」という願いに変わり、多くの人を巻き込む大きな動きとなっていたのです。

人々の視点が変わると、湿原の価値も変わります。不毛の大地「ヤチ」として捉えられ、一時は開発の対象ともなった場所は、ラムサール条約に登録され、国立公園となり、世界的に貴重な湿地として知られるようになります。

釧路湿原は今も多くの人を魅了し続けています。ガイドとして観光客に湿原の魅力を伝える人、研究を通して生態系の変化を見守る人、保全活動を進める人、それぞれの立場から湿原を見つめ、未来へとつなぐ努力を続けています。本誌の制作を通じ、そういった人たちの活動や思いが今の釧路湿原を形作り、次世代へと引き継がれる礎となることを感じました。

この聞き書き集が、釧路湿原にまつわる物語を知るきっかけとなり、読者の皆さんがワクワクし、「おもしろい」と感じる瞬間をもたらし続けてくれることを願っています。そして、ぜひ一度、釧路湿原国立公園を訪れ、そこに息づく自然と人々の営みに触れてみてください。

最後になりましたが、本誌をここまで読んでいただいたみなさま、そして取材にご協力いただいた釧路湿原国立公園とともに暮らすみなさんに、心より感謝申し上げます。

株式会社オールアバウト  
一般社団法人ドット道東

釧路湿原国立公園  
不毛の大地が  
世界の宝へ  
国立公園ものがたり

発行月 ..... 2025年3月第1刷発行  
発行元 ..... 環境省自然環境局国立公園課国立公園利用推進室  
東京都千代田区霞が関1-2-2 中央合同庁舎5号館  
TEL 03-5521-8271  
<https://www.env.go.jp/nature/nationalparks/>  
企画元 ..... 株式会社オールアバウト  
東京都渋谷区恵比寿南1-15-1  
APLACE恵比寿南3F  
<https://corp.alabout.co.jp/>  
編集元 ..... 一般社団法人ドット道東  
北海道北見市中央三輪9丁目4-11  
<https://dotdotto.com/>

全体管理 ..... 子上知穂  
五十嵐亮太  
土居里佳  
編集主幹 ..... 須藤か志こ  
編集・制作進行 ..... 吉田拓実  
佐々木のか  
アートディレクション  
鈴木美里  
デザイン ..... 鈴木美里  
青砥美穂子 (Bluepine)  
加藤舞 (One Fine Day)  
西菜花 (株式会社:ION)  
執筆 ..... 春日明子  
須藤か志こ  
高山かおり (Magazine isn't dead.)  
中山よしこ (シリエトクノート)  
撮影 ..... 坂本明子  
校正 ..... 山本小時  
企画協力 ..... 佐竹直子  
釧路国際ウェットランドセンター  
写真提供 ..... 小川清史  
坂本明子  
佐竹直子  
新庄久志  
照井滋晴  
Mariko Miura

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準にしたがい、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料【Aランク】のみを用いて作製しています。



北海道

